

滝沢秀樹著

『朝鮮民族の近代国家形成史序説 —中国東北と南北朝鮮—』

御茶の水書房, 2008年

本書は朝鮮義勇軍に注目して抗日戦争・国共内線・朝鮮戦争の間、朝鮮民族が果たした近代国家形成における歴史的役割を明らかにしようとしたものであり、著者が約30年にわたって行ってきた韓国社会研究の延長線上で著された力作である。実際の内容は朝鮮義勇軍の歴史を分析する研究というよりも、評者としては朝鮮義勇軍やその構成メンバーであった中国朝鮮族（以下、朝鮮族）の果たした役割の歴史を掘り起こすことから東北アジア地域の今後の展望を捉えていこうとする試みであるように受けとめた。

本書の内容は以下の通りである。「Ⅰ東アジアの近代と国民国家」ではまず、中国・朝鮮（南北朝鮮）・日本の3国は、前近代から「自明の前提」として存在していたとされる「想像の共同体」をもとに近代国家が成立したという点で、世界の中で例外的な存在であるとし、それ故にこれらの国家の中には「市民社会」を形成するだけの前提が備わっているとみる。

続く「Ⅱ現代中朝国家関係に関する歴史的考察」「Ⅲ抗日戦争・国共内線～朝鮮戦争期の中国東北における朝鮮人軍部隊」は朝鮮義勇軍に直接言及した、本書の中心といえる部分である。朝鮮義勇軍出身者は「東北解放戦争」で大きな役割を果たしたことや、朝鮮戦争中に参戦した中国人民志願軍の中には多くの朝鮮義勇軍出身者が含まれていたこと、そして朝鮮戦争前から中国人民解放軍の朝鮮人部隊が朝鮮人民軍に「編入」されていた事実注目して、3つ目の事実が中国人民志願軍参戦と同じ文脈でなされたものであると指摘している。その後、「祖国解放」や中国革命の成功に大きな役割を果たしてきた朝鮮人民軍の歴史は中国のみならず、南北朝鮮でも忘れ去られてきたが、「祖国解放」のために戦いながら結局、中国の少数民族の立場にとどまらざるを得なかった朝鮮

義勇軍の人々に言及することで、朝鮮族の歴史にもっと着目していく必要が述べられている。

以下、「Ⅳ“グローバル化時代”の東アジアにおける『人口移動』の実態」、「Ⅴ東アジアの経済協力と国家間関係」、「Ⅵ『東アジア共同体』創設構想をめぐって」、「Ⅶ社会構成体移行論の新たな枠組構築を目指して」、「Ⅷ[対談]東北アジア地域史研究における国家と民族」と展開していく中では、「在外コリアン」のネットワークを含めて南北朝鮮が中心となって「東アジア共同体」を構築していくべきこと、「六者協議」の枠組みがこれからの東北アジア地域の経済協力関係に拡大することを希求するという立場から、東北アジアの近代国家成立史の固有性などが考察されている。また、それらを通じて、国家の枠組みを越えた「市民社会」の形成の可能性が検討されている。

本書で構想されている内容には、筆者も認めているように、南北朝鮮が「東アジア共同体」の中心になるべきという主張をはじめ、直ちに首肯し難い主張がいくつか含まれており、それらの部分ではより丁寧な説明が欲しかった。また、朝鮮義勇軍という男性中心の軍事組織の歴史と、現在の朝鮮族がこの地域の平和的発展に果たしうる可能性について、どのように結びつくのかももう少し検討がなされてもよいのではないと思われる。しかし、市場経済の荒波の中で民族共同体の「危機」に曝されている朝鮮族の過去—現在—未来を結びつけ、今後の可能性について検討するという姿勢に、朝鮮族研究に関心をもってきた評者としては心より敬意を表したい。その意味で、本書は研究者の世界だけにとどまることなく、国家を越えた今後の東北アジア地域での市民社会構築に関心をもつ人々に広く読まれていくべき好著であるといえる。

(出羽孝行 龍谷大学)